

## ロックの哲学と「子ども」の概念

柿沼宏行

### 0. 導入

『人間知性論』と『統治論』という二つの主著をもつ思想家、ロックをこのように紹介するのはひとまず妥当といえるだろう。主著と呼べる作品を複数残している哲学者は彼以外にも少なくないし、それが異なる領域に属していることも特に珍しいことではない。たとえばアリストテレスやヘーゲルの諸作品を我々はすぐに思い浮かべることができる。ただロックに関して、そうした他の歴代の思想家たちと事情がどこか異なっているとすれば、それは他の思想家の場合とは違って彼の二つの主著がロックという思想家の個性によって包摂されているという印象が薄いところにある。『人間知性論』と『統治論』を並置して、あるいは同時に考えることには「角を有する円を表象する」といったときと似た独特の困難がつきまとう。もちろん、このような感覚をロックを知る誰もが抱いているとは言わない。だがもしそうだとすれば、それは我々が彼に対して伝統的に行使されてきた分割を、所与のものとして受け入れているからだとは言えないだろうか。つまり「ロックがいて、『人間知性論』と『統治論』がある」のではなく、「『人間知性論』と『統治論』があってロックがいる」のだというように。そしてもし、以上のような陳述に少しでも正当性があるとすれば、その原因はロックの著作自体にも求めることができるはずである。

ロックによる二つの主著は、その達成がそれぞれに偉大であっただけに、結果として別々の文脈に繰り入れられることになった。あるいは一歩進んで、それらは別々の文脈を生成させることになったといってもいい。一方で『人間知性論』は、パークリ・ヒュームという哲学的後継者を得ることでイギリス古典

経験論の開始点となり、他方で名誉革命を理論的に基礎づけたと評される『統治論』は、後のアメリカ独立革命とフランス革命において、思想的に参照・引用されることによって、まさに世界史的な書物となることとなった。こうしてほぼ同時期に並行して執筆され、共に 1690 年に出版された二つの著作は、後の歴史の動向の中で、それぞれ二つの異なる「歴史」に帰属することになったのである。

「ロックはあらゆる哲学者のうちでもっとも幸運(fortunate)な人物である」。ラッセルはロックをこのように評している<sup>1</sup>。幸運な思想家。我々はラッセルと共に、そして彼以外の多くの人々もそうしてきたように、再度このような賛辞をロックに捧げるべきなのだろうか。ラッセルはこの一文を含む『西洋哲学史』のなかの「近代哲学史」の巻でロックについては例外的に三つの章を割いており<sup>2</sup>、彼のロックに対する思い入れの強さが伺われる。そしてこのとき「幸運」という言葉を選択したのは、広く受容されてきたという、ロックをめぐる状況が考慮されてのことだろう。もちろんそれは歴然とした事実であり、一般的にもロックはそのような思想家として受けとめられてきている。だがそれが事実だからといって、そのような幸運や受容が充実な理解に裏打ちされたものだったとまで言うてしまうのなら、それはいささか性急だと返さねばならないかもしれない。仮にそうだというなら、すべては理解され実現済みのこととして、もはや彼から新たに学ぶべきことはほとんどないということになってしまう。そういう意味では、思想家にとって受容とは無条件に悦ばしい出来事とは言い難いのである。ロック自身はそれを望んでいたにしても、いや望んでいたからこそ、こうした両義性について再考してみる必要はあるだろう。では「もっとも幸運」と評されるロックは結局のところ、いったいどのような受容と理解の錯綜のなかにいるのだろうか。

我々はこの疑問を、ロックの二つの著書が享受したそれぞれの幸運は、思想家としてのロック個人にとっても充実な幸運でありえるのかという問いで置き換えたいと思う。先にみたことと関連づければ、ロックの思想家としては異例ともいえる幸運は、それが二つの幸運であったことと大きく結びついている。あの呑みがたい分割こそが、思想家ロックの評価を特異な仕方で押し上げているのであり、奇妙なことではあるが彼はその幸運の過剰さの只中において、自

身の評価における一貫性の放棄という法外な代償を支払っていることになる。とはいえ、これから以下で行おうとしているのは、このような断絶を何らかの恣意的な連続性で埋め立てようとしたり、すべてをロックという思想家の同一性のうちに回収しようと企てたりすることではない。そうではなく、『人間知性論』と『統治論』という兩岸をかたち造ったと思われる、共通するひとつの流れを探りたいと思っているのである。それは単純な方法、両著に共通して見出せる「子ども」という言葉に注目することによって行い、特に本稿では『人間知性論』に即してロック哲学における「子ども」の役割を明らかにしたいと考えている。したがって、ここでは『統治論』を直接検討することはできないが、それは「子ども」という共通項を通じてひとつの前提として以下の論述を支えることになるだろう。

ところで、哲学と政治という分割とはべつに、『人間知性論』自体がどのような一貫性を有しているのかという問題がある<sup>3</sup>。『人間知性論』は4巻からなる大きな著作だが、中でもその構成に照らしたときに最も厄介だと考えられてきたのが生得原理批判を展開している第1巻であり、このテキストに対しては現在に至るまで極端に低い評価しか与えられてきていない。他方で彼はこのテキストによって17世紀から18世紀にかけて行われた生得観念論争に大きな弾みをつけ、そこではこの同じテキストが多大な関心を引き起こしてきた<sup>4</sup>。だが、デカルトやライブニッツを論争相手とするとされるその議論においても、ロックは分が悪いという見方が一般的であって、いずれにせよ彼の生得原理批判には、評価の観点からすれば不可解な印象が残る。そしてこの、徹底的でありながら不明瞭であるロックの生得原理批判のなかにこそ、「子ども(child)」という単語は数多く見出せるのである。

『人間知性論』には「子どもたち」、「幼児(infant)」から果ては「胎児」に至るまで、驚くほどさまざまな形で、そして実にさまざまな箇所ですべて「子ども」が登場させられているが、その主題が理論的・実践的な生得原理の否定に充てられていることを考えれば、なかでも第1巻に集中して「子ども」が登場しているのは自然な成り行きとも思われるかもしれない。しかし生得性を否定するために実際の子どもを持ち出すという「子どもじみた」論法のせい、あるいは子どもは子どもに過ぎないという割り切りのせい、これまでこの言葉に対し

て特に理論的な関心が払われることはなかった。そこで以下の論述では、いまままで目を止められることのなかったこの「子ども」こそが、第1巻と第2巻の断絶（と見えてきたもの）を架橋している概念であったという見直しを採る。そしてこれを明確化したのち、さらにその概念がより大きな意義を含んでおり、これまでは不可解さにはしか見えなかったものが、逆に全体を支える理念を示していたという可能性まで提示したい。そしてこの我々の企てが、哲学史と政治（学）史に向かって解消してしまい、長い時間に埋もれたうえ、いまや識別しがたくなってしまった感のあるロックの思想家としての個性を発掘する試みにもなればと思っている。

## 1. 「子ども」と「白紙」

まずロックが「子ども」を用いる典型的な仕方を見てみたい。彼は理論的な生得原理と言われているものの範例として、「およそ在るものは在る(What is, is.)」と、「同じ事物が在って在らぬことはできない(It is impossible for the same thing to be and not to be)」という二つの論証原理を挙げ、これらを支持する者に対して次のような批判を行なう<sup>5</sup>。

なぜなら、第一、子どもたちや白痴(idiot)は明白にこれらの原理をいささかも認知しないし、考えない。(中略)心に何かを印銘して、しかもこれを知覚しないというのは、ほとんど理解できないことのように私には思われる。それゆえ、もし子どもたちや白痴に魂(soul)があり、心があり、それら魂・心にそうした印銘があるなら、子どもたちや白痴はその印銘をいやが応でも知覚しなければならず、それらの真理を必ず知り、これに同意しなければならない<sup>6</sup>。(I. i. 5)

このように彼は、生まれながらに備えているという意味で「生得(innate)」とされる観念や原理を退けるために、実際の子どもたちから説き起こして反証するという手法をとっている。つまり、実際の子どもたちはこうした原理を知らないのだから、子どもたちが心にこうした原理を刻み付けられて生まれてくると

いうのは誤りである、といった論証を積み重ねて行くのである。

たしかに「生得」という言葉を正面から取るなら、それに対する批判を、実際の子どもの様子の様子から説き起こして行なうのは自然であるともいえよう。しかし、これがどの程度自然であるのかについては、『人間知性論』が生得原理批判という唐突で単純なテーマから開始されている理由と併せて、慎重な検討が必要である。というも先にも述べた通り、これまでの生得観念論議においては、このように実際の「子ども」から始められるロックの論証の手続きがまともに検証されたことはほとんどなかったからであり、いわばロックの生得原理批判は文字通りには読まれてこなかったからである。

だがそれは、哲学的に整備されてきた生得論と経験論との対立という図式からみるならば無理もないことだ。ライプニッツの反論以後、能力や傾向性といった要素を交えて極度に複雑化・高度化した生得観念論争において、実際の子どもの様子を実在的な論拠として持ち出すという論法を真面目な議論の対象とするのは難しいことだった。そしてその結果、ロックを擁護する側も非難する側も、彼が本当は何を言おうとしているのかを知るために、実際には書かれてはいないことを求めて、実際に書かれていることに向こう側を見通そうとするといった類の「推論」を強いられることになった。つまり、ロックがこの論争に火をつけた張本人であるのは確かであるとしても、その論争の枠組みから彼の主張を読み込もうとすると、彼が何を言おうとしているのかが分からないという不条理な状況が生じてきたのである。しかし、だからこそ『人間知性論』の第1巻を読解するにあたっては、従来の生得観念論争の枠組みをはずし、ロックの言葉をそのままに受け取ることが必要だろう。彼がなぜこのような素朴な生得原理批判を行い、またそれが結果として何を理論的に引き起こすのかを、論争の枠組みを離れたうえで見定めてゆかねばならないのである。ただここでは差し当たり、彼の議論が「子ども」という言葉においてある際だった素朴さを湛えており、その素朴さがそれ自身の性質によって見過ごされてきたということだけを確認しておきたい。

ところでこのような事情を抱えながらも、ロックの『人間知性論』はその内に「子ども」に替わりうる「白紙(white paper)」という比喻を有していたことから、彼の生得性にまつわる問題を別の次元で処理・解決することを哲学史に対

して許してきた。この場合の問題とは、ロックの用いている「子ども」という言葉のもつ実在的な水準は、生得観念という理論的・抽象的な水準に対して、何らかの共通する平面で交わりえているのか、もしそうであるとすれば、その交わりは彼によってどのように確立され意識されていたのか、というものである。

生得観念論争は、はっきりとは知りえない対象について論じるというその性質からいって、どうしても抽象化された議論にならざるをえないのだが、ロックの第1巻における諸議論はそうした抽象性の格子を意識しているようには見えない、という疑念を——少なくとも論争を成立させようとするものには——惹起する。そして彼が自己の主張を、「子ども」という一語によって抽象的水準においては洗練しないままに済ませたために、それを再構成する側は独自に抽象化する作業を行わなければならない、またそのような作業を施されるにしたがってロックの「子ども」に関する記述は重みを失って捨象されて行くという動きが生じた。そしてこうした事情があったからこそ、「白紙」という比喩は「子ども」に替わるものとして注目され、さらにはそちらの方が初めから議論の中心に位置していたかのように機能したのだろう。このとき「白紙」の比喩は、議論を抽象的な次元に移行させることによって実在性と抽象性の間に横たわる葛藤を一気に消去する役目を果たす。また『知性新論』のライブニッツが、ロック自身は使用していない「タブラ・ラサ」をロックの主張に見立てたことがおそらくは決定打になった。

よって、もしロックの主張が誤解に曝されてきたとするなら、その誤解の核心はここにある。なぜなら『人間知性論』において「子ども」という語は無数に見出せるのに対し、「白紙」という言葉は著作全体を通じてもたった二回しか使われていないからである。そしてこの文献的事実を無視するかのよう、「白紙」の比喩がロックの思想の全体像を集約する言葉にまでのぼりつめていったことは、この問題の根深さを窺わせる<sup>7</sup>。ここでは葛藤の消去とロックの思想の広範な受容はおそらく同時的であり、また相補的なのである。そこで以下では、どのようにして「子ども」が「白紙」とすりかわるのかを探る糸口として、まず「白紙」の比喩に潜んでいると思われる問題点を明らかにしたい。二箇所が使われている「白紙」であるが、重要なのは二度目の使用であり、これはロッ

ク哲学全体の評価に決定的なイメージを提供してきた重要な箇所にある。引用しよう。

そこで、心は、言ってみれば、文字をまったく欠いた白紙で、どんな観念も欠いているのだと想定しよう(Let us then suppose)。すると、どのようにして心は観念を備えるのだろうか。人間の忙しく果てしない空想がほとんど限りない多様さでそこに描いてきた、あの膨大な蓄積を心はどこから得るのだろうか。どこから心は理性と知識のあらゆる材料を得るのか。これに対して私は、一語で、経験から(From experience)、と答える。私たちの知識はすべてそれに基づいており、究極的にはそこから自らを引き出すのである。(II. i. 2)

ここから分かるのは、ロックは心は白紙であると断言しているのではなく、心はいわばそのようなものだとして想定しよう、と呼びかけているのだということである。そして我々はここで「白紙」という語以上に、この「想定」という形式の方に注意を払ってよい。おそらく彼はこの場所で、デカルトの懐疑に発する「想定」を形式の上で反復しているのである。だがロックの場合、懐疑は深められることなく、想定は一度行使されるのみであり、それには即座に「経験から」という簡潔な解答が与えられるのみである。ではロックがここでデカルトの形式を繰り返していることには、どんな意味があるのだろうか。あるいは、こう問うてもいい。「白紙」と「経験」という経験論の二大標語が揃っているという理由から、ロック固有の思想として最も知れ渡っているこの箇所に、なぜデカルトがいるのか。こうして、ロックのイメージを決定してきたこの数文には、ここ以外には一度しか使われていない「白紙」の想定、そしてデカルトの影という二重の霧がかかっていることになる。よってこのことについて考えるためにも、ここからは同時にデカルトのテキストにも取り組んでいく。

## 2. デカルトの「幼年期」

周知のように、感覚の懐疑や欺く神の想定など、『省察』の中でデカルトは

数多くの懐疑を繰り出している。そして「第1省察」の冒頭では、なぜそうした懐疑や想定を行うのかということも含めた、省察の動機が次のように述べられていた。

すでに何年も前に、私はこう気付いていた——まだ年少の頃に私は、どれほど多くの偽であるものを、真であるとして受け入れてきたことか、また、その後、私がそれらのうえに築きあげてきたものは、どれもみな、なんと疑わしいものであるか、したがって、もし私が学問においていつか堅固でゆるぎのないものをうちたてようと欲するなら、一生に一度は、すべてを根こそぎくつがえし、最初の土台から新たにはじめなくてはならない、と。しかし、これは類のない大仕事であると思われた。そこで私は、この企てにとりかかるのに、もうこれ以上適した年齢はやってこないと思われるほど、成熟した年齢になるのを待つことにしたのであった。こういうわけで、私は、ずいぶん長い間延ばしてきたので、実行のためにこれ以上残っている時間を、なおも躊躇して空費するなら、もはやこれからは、非難を受けねばならぬだろう。(MP. I)

また、『哲学の原理』の第1部の1節目には次のようにある。

われわれは生まれたときは幼児であったゆえに、そして、われわれの理性を完全に使用する以前から、感覚的に判断をくだしてきたゆえに、多くの先入見によって真理の認識から遠ざけられている。そこで、そういう先入見から脱するには、少しでも不確実だと思われるすべてのものを、一生に一度は、疑おうと努めるよりほかにいように思われる。(Pr. I. 1)

すべてを疑わなければならない理由として、これらに共通しているのは、年少期や幼児期に人の受け入れてきた多くの「先入見」が、真理に達するに際して大きな妨げになっているというデカルトの洞察である。この洞察が少しでも疑いを差し挟むことのできるものは偽とみなすという、彼の暴力的なまでの懐疑を駆動しているのだと、ここで彼自身証言しているといつて差し支えないだろう。つまり年少期や幼児期というのは、やがては除去・訂正されるべきである

ような不確実な知識が蓄積していく過程であるとして、彼には不可欠というよりは不可避な、しかもいつかは覆さねばならないようなものとして感じられているのである。

しかし「一生に一度」・「成熟」してからという部分については、額面通りに受け取るべきなのかは分からない。確かにデカルトが『省察』を著したのは彼が44歳のときのことであったにしても、彼はそれ以前の著作である『方法序説』において、「かくて、われわれの感覚がわれわれをときには欺くゆえに、私は、感覚がわれわれの心に描かせるようなものは何ものも存在しない、と想定しようとした」(DM. IV)と述べていることから、すべてを『省察』執筆の期間に封じることは不合理であると思われる。また彼は、「当時23歳であった私は、もっと成熟した年齢に至った上でなければ、そういうことの決着をつけようなどと企てるべきではないと考えた」(DM. II)とも言っている。よって生涯に一度の懐疑というよく知られている彼の決意には、常に疑いながら、一度はさらに徹底させるという含意があるとみなすべきだろう。では23歳のデカルトが受けたという哲学的啓示は、どのような形で実を結んでいくのだろうか。さらに彼が幼児期に関して述べている箇所を探していくと、我々は『哲学の原理』の次のような記述に行き当たる。

そして実際、幼児においては、精神は、身体にすっかり没入していたので、多くのものを明晰に知ったにしても、何一つとして判明には知らなかったのである。にもかかわらず当時から多くのものについて判断してきたので、こうしてわれわれは多くの先入見を身につけるにいたり、のちになってもたいいていの人々がそれら先入見を捨てきれないでいる。(Pr. I. 47)

これは、痛みのように認知は明晰(claire)でありながら判明(distincte)ではないこともあるのに対して、あらゆる判明な認識は明晰であると、明晰判明について説明された後に述べられていることである。つまりここでは、「明晰判明」とは正確にいうならば「明晰にかつ判明に」ということであること、そして幼年期には何かを明晰には認知するにしても、幼児は——おそらくは神に与ると彼が考えている——認知の判明さからは締め出されていること、こうしたことが言わ

れているのである。また 71 節「誤謬の主要な原因は、幼年時代の先入見から生ずるということ」で彼は次のように強調している。

そしてここに、あらゆる誤謬の第 1 の主要な原因が認められる。すなわち、幼時においてはわれわれの精神は身体にきわめて緊密につながっていたので、もっぱら、身体に刺激を与えるものを感じるところの思惟のはたらきだけを、受け入れていたのである。(Pr. I. 71)

これを第 4 省察の「私はここ数日の間に、精神を感覚から引き離すことにだいぶなれてきたし……」(MM. IV) というフレーズと突き合わせてみれば、そこにいかなる結果が生じるかは明らかだろう。デカルトは「精神について、できるだけ透明な、物体のあらゆる概念からまったく区別された概念」(MP. 要旨) を求めていたのだったが、そこから帰結する精神そのものの作用と精神に包括される限りでの感覚(私は熱いと感じる、と思う……)との差異という論理によって、「感覚」は「幼児期」とともに、「精神」にその固有の確実性を差し押さえられてしまうのである。またさらに彼は、精神の身体への没入が幼年期の先入観を生んでいるとともに、そうして生じてしまった幼年期の先入見が人々を一生にわたって支配しているとも注意を促す……。

このように彼は「幼年期」に対する徹底した抑圧を行なっている。だがこれは違う見方をすれば、「幼年期」が彼の哲学にとって——否定的な様相においてではあれ——欠くことのできない動因として組み込まれていたということをも意味している。「幼年期」の不確かさや不安定さこそが「明晰判明」や「明証性」を要請するのであり、そうであればこそ、それは確かな「子ども」として個体化されることのないような既に過ぎ去ってしまった一期間、真理からも実在からも遠ざけられ、あたかも幻影であるかのように揺らいでいる惨めさに彩られた記憶のようなものに過ぎないとされるのである。そこには何の重要性も認められないばかりか、明証な現在に対して誤謬や偏見の要因を送り込んでくる源とみなされて、ほとんどあらゆる権利が剥奪されてしまう。感覚の懐疑というもの自体がこの剥奪の遂行過程なのであり、コギトが彼の哲学の肯定性の極だとすれば、幼年期とはその否定性の極なのである。こうした視点に立てば、『方

法序説』がどのように特異な遍歴体を採用していたり、『省察』が過剰なまでの内在的遂行性で充満していたりしていたことは、いずれも「幼・少年期」や「感覚」を自身から駆り出すための、戦術的な創造そして選択であったとも思われるのである。

ところで、この肯定性と否定性の両極がある一貫した論理によって相互的な関係を結んでいるとすれば、その理論的な構造をまた別の角度から照射することによっても、デカルトの「幼年期」を抑圧する意図は補足されるだろう。彼は『省察』において「私を生み出した原因」と、「私を保存している原因」について考えながら、両親について次のように書く。

最後に両親に関していうなら、かつて私が両親について考えたことはすべて真であるにしても、しかし明らかに、彼らは私を保存しているのではないし、私が考えるものであるかぎり、決して私をつくりだしたのでもない。むしろ彼らはただ私、すなわち精神（いま私は精神のみを私として認めているのである）がそのうちに内在している私の判断するところのあの質量の中に、ある種の資質をおいたにすぎないのである。(MP. III)

『省察』において両親は、「私、すなわち精神」の原因としてはそれが内在すると考えられる質量（すなわち身体）に「ある種の資質」を与えたという以上のものとしては認められない。ここでは幼年期のみならず、両親までが小さくない排除を被っているのである。なぜか？ コギトは絶対的に孤独だから、というわけではない。デカルトは「神が私を創造した」(ibid.)と考えているからである。そうであればこそ、「私」の真の原因である神、その神の観念と、その「似姿にかたどってつくられた」(ibid.)「私」自身（の魂）の観念は生得的だとされるのだ。デカルトにとって観念の生得性は神の絶対性と密接に結びついているのである<sup>8</sup>。そして『哲学の原理』第一部の最終節では、「我々自身の判断ではなく、もっぱら神の権威のみに信頼を寄せるべきである」(Pr. I. 76)と注意が与えられた後に、以上で辿ってきたような論理が次のように要約されている。

しかしながら、神への信仰がわれわれに何も教えていない事柄においては、真であ

と見極めたことのないものを真であると見なしたり、大人になってからの理性よりも、感覚をすなわち幼時の無思慮な判断を、信頼したりするのは、哲学者にはふさわしからぬことなのである。(ibid.)

しかし問題は哲学者だけに関わるのではない。「実際われわれは、いかなるものについても、それがどのようなものであるかを感覚だけで知るわけにはいかないのであって、大多数の人々が全生涯を通じて、なにごとをも不明瞭にしか認識しないということもそこに起因する」ともデカルトは言うのである(Pr. I. 73)。

そろそろ整理しよう。デカルトにとって「幼年期」と「感覚」とは、不確かさという否定的な価値においてほぼ同一視されうるものであり、それらの克服は彼の哲学体系構築の動因でさえある。そして不安定で不確実な「幼年期」と「感覚」に対して、神こそが確固とした揺るぎなさを確認しており、ゆえに神へと向かうことは、とりわけ「幼年期」に対する厳しい眼差しとして表出するだろう。結果、神の誠実さが増すにつれて、またコギトが確かなものになるにつれて、「幼年期」は「感覚」とともにその固有性と権限を霧散させ、実在性を失ってゆくことになる。つまり、デカルトは「子ども」を認めない。

### 3. 子どもの概念

デカルトが生得観念を支持し、ロックはそれを拒絶したとするなら、この不都合には以上のような背景が潜在していたと考えられる。生得観念論争の裏には、単に認識のシステムをどう捉えるかというところにとどまらない対立が秘められていたと考えられるのである。そして後発のロックは——デカルトを偉大な先行者として認めつつも——これをひとつの挑戦として受け入れたのだろう。そこで、以下では再度生得論争に戻ったうえで、薬人形に対する力の浪費とも揶揄されるロックの批判が、どのように効果的にデカルトに挑みえているのかをみていきたい<sup>9</sup>。

ロックの生得原理批判が受け入れられない理由の一つに、最初にはっきりと「観念を受け取る力能(power)」(I. ii. 1)を認めておきながら、他方で(なぜか)

彼は真理が生得的に印銘されているという可能性については断固として否認すること、しかもそれを膨大な記述を費やして行っていくことの不可解さがあると思われる。最終的に到達する真理が変わらないのなら、それがもともと心の中であってやがて意識化されるのか、それとも外界にあるものが理知によって発見されるのかという区別には、それほど意味がないと感じるのはもっともだろう<sup>10</sup>。また、ロックのこのような強弁は、2巻以降で経験を知識の唯一の源泉とするための便宜的措置、つまり第2巻以降への依存であり、しかも論点先取ではないかというのもしばしばなされる指摘である<sup>11</sup>。いずれにせよ、懐疑的・消極的内容でありながらそれを強引に押し通そうとしている印象を与えることが、このテキストが問題視される主要な理由ではないかと思われる。だが既に第2巻のはじめに置かれた「白紙」の比喻について考察した我々は、この彼——あるいは『人間知性論』——に対して突きつけられた疑念に、もう次のように答えることができる。すなわち、『人間知性論』の第1巻と第2巻が緊密な連繫を結んでいることは確かであるにしても、それは互いに独立を見せかけながら実は相互に依存し合っているという在り方においてではなく、「白紙」の想定が喚起するだろう懐疑が、その前に置かれた第1巻で集中的に扱われているという仕方において、そうなのだということである。ロックによる懐疑は生得原理に対する疑義の数々として表出し、疑義の数々は結果として幾つもの反証というかたちで実を結んでいる。よって、なぜそのような想定や懐疑は必要だったのかというところに問題は移るのだが、これにも我々はもう答えることができる。すなわち、デカルトが「考えること」から「幼年期」を排除するのに対して、ロックは幼い「子ども」にもそれを認めているというのが、その理由である。「それがいつかを決定できるかどうかは重要でないにしても、子どもたちが考え始める時機というものは確かにあって、彼らの言葉や行動は、子どもたちが考え始めることを確信させる」(I. ii. 25)。

デカルトはコギトによる神との結末から幼年期や無思慮な人間を訴追するのだが、ロックは弱さや不安を抱えた人間という現状から子どもたちや幼児を追認する。弱さとは、人々が子どもの頃に根拠もなく神によるものとして教えられたことに服従し続けてしまうことであったり、日々雑務に追われる中で、さまざまな判断を特定の他者に全面的に預けてしまうことであったり、「無知に

よって、怠惰によって、教育によって、あるいは軽率によって、命題をただ信用してしまうこと」等にまで及ぶが(I. iii. 24)、とりわけこうした弱さに基づく支配を被るのは、「明白にすべての子どもたちと若者の場合である」(I. iii. 25)と、彼は言う。つまりロックは、「生得原理」を支配の技法としても意識しているのであり、人間である以上はその弱さをはねのけられず、特に子どもや若者はそれから甚大な影響を被ると——おそらくは彼の持つ政治的資質からも——警告しているのである。こうした言葉は、あるいはデカルトが日々を凌ぐために採用した「仮の道徳」と対応をなしているのかもしれない。すると彼らはそこではいわば同じ敵と向かい合っていることになるのだが、しかし最終的には両者は袂を分かつことになる。なぜならロックは「子ども」を肯定することを選ぶからである。彼が「子ども」の素朴な提示によって生得原理を否定するのはこのためであり、それこそがデカルトに対する極限的な批判を行なう道ともなる。デカルトが知性の空白地帯として「幼年期」を排除するなら、ロックは空白の知性を擁護して、「子ども」の側に立つのである。彼は周到にも胎児や新生児にまで配慮して、次のように言うだろう。

もし私たちが新生児を注意深く考察すれば、この子どもたちが多くの観念を携えてこの世に生まれると考える理由はまずないだろう。なぜなら、母親のお腹で感じたかもしれない飢渴や暖かさやある痛さといったかすかな若干の観念を除いては、なにか決まった観念は子どもたちにいささかも現れず、特に、生得原理とみなされる普遍的命題を作り上げる名辞に相応する観念は現れないからである。(I. iv. 2)

したがってロックは、コギトから主権を「子ども」へと移すことを要求することになる。だがどのようにして？ 他にもない、デカルトが「幼年期」とともに抑圧した「感覚」を哲学的に救済することによってである。ロックの『人間知性論』第2巻では、デカルトとは逆に、すべての精神的作用が内的感覚(internal sense)である内省(reflection)に包摂され、それが外的感覚(external sense)たる感覚(sensation)と対をなすことで、すべての事柄が感覚の相の下に捉えられることになるのである。我々はこれを感覚論的転回と呼んでもいいだろう。このことを彼は、やはり「子どもに観察できる」という表題の節(II. i. 6)で根拠づ

根拠づけている。

哲学者が教える「感覚」や「知覚」、「外部感覚」や「内部感覚（反省）」といったロック経験論の術語は、我々に対して無味乾燥な響きを与えてきたかもしれない。だが、それらにはロックの祈りにも似た強い思いが込められていたはずなのである。生得原理批判を行なうときに彼の言葉が帯びる苛烈さは、おそらくその思いの反映である。

しかし「子ども」が成し遂げるのは、これだけにとどまらない。ロックは第3巻であらゆる言語の起源を「感覚」のなかに見ているが(III. i. 5)、まだ言葉を持たない幼児でも既に観念を有しているということが彼にある気付きを与え(I. ii. 15)、彼の名高い言語論と記号論を結実させたとも考えられるのである。よって「子ども」は、母胎となって経験論を生成させると同時に、それ自身が彫刻されていくという意味で、既にロックにおいてはひとつの概念となっていたと我々は考える。藁人形に対する攻撃という不満、今度はロックがそれを口にす番かもしれない。彼は至るところで「子ども」について語っていたし、決してそれを隠したりはしていなかったのだから。

#### 4. 結びにかえて

「幼年期」という、これまでそれ自体としてはあまり注目されることのなかったデカルトの観念が、ロックの「子ども」という概念を照らし出し明るみに出す様子を描いてきた。さらに先へと進むべきであろうが紙面は尽きつつあり、それは今後の課題としたいと思う。最初に述べた『統治論』について言えば、フィルマーの『パトリアーカ』に向けられた第一篇は、『人間知性論』の生得原理批判と同様、いまだは見捨てられたテキストとなっており、類似の視点からの検討が可能だろうと思われる（そこではアダムから受け継がれているはずの正統な相続権を見失ってしまった「子どもたち」としての人類の物語が語られている）。『人間知性論』における「子ども」が経験論的主体だったとするなら、『統治論』における「子ども」とはロックにとって政治的主体となるだろう。本稿で最初に立てた目標にはまだそれほど近づけていないが、こうしたことも

含め今後も彼の「子ども」の概念について考えていきたい。

## 註

- <sup>1</sup> Russell, B. (1945=1972).
- <sup>2</sup> 「第3巻 近代哲学」のなかで、「第13章 ロックの認識論」、「第14章 ロックの政治哲学」、「15章 ロックの影響」の3章がロックにあてられている。
- <sup>3</sup> Ashcraft(1991)は「ロックの哲学を、全体として見たときにどのように性格付けるのかは、難しく議論の余地のある問題であることが分かっている」と述べているが、「全体として見たとき」の難しさという印象は、彼以外の多くの研究者にも共有されていると思われる。
- <sup>4</sup> この論争について Adams(1975)は、「17世紀と18世紀における生得論者と経験論者の間の論争は、哲学的な議論のうちで最も有名なものの一つであるのと同様に、最も纏れ合って曖昧なもの一つでもあり、「17世紀と18世紀にかけての関心に関する限りは、とりわけデカルトとロックの間にある意見の相違が、この論争の中心的な不一致であったように私には思われる」と前置きしてから、両者の精緻な比較を行なっている。ただ私見では、最終的にこの生得観念論争をひとつの問題として独立させることになったのはライブニッツの『知性新論』であり、そこで初めて論争としての対称性の条件が整えられたように思う。
- <sup>5</sup> ただ、ロックが想定するこの支持者が具体的にどのような人々を指しているのかは不明である。この点に関して Greenlee(1972)は、「ロックが扱っている生得観念の教説は薬人形のように思われるのに、彼はそれと格闘するのに明らかに的外れで不必要な労力を費やしている」ことから、ロックの論戦の標的が何なのかという問題が生じるとしている。「しばしば注意されてきたことだが、それらの主張は説得力がないというよりも、単にデカルトの立場に呼応していないという理由から、生得観念の支持者として有名なデカルトでさえロックの議論には心を動かさねえだろう。またロック自身が真理を知るための生得的な能力(capacity)を認めていることから、「この論争をさらに探求するにしたがって、何が真の問題なのかを明らかにするのが次第に難しくなり、結局、最終的にはそこには現実的な問題は何もなかったのだということが明らかになる」とまで彼は言う。Greenlee はこの問題についてさらに論究を進めているが、その過程で「(彼が考える) 論敵を同定することそれ自体は、生得観念を巡る論争におけるロックの本当の関心を理解できるようにするには不十分だろう」という結論に至っている。また国内では一ノ瀬(1997)がロック擁護の立場からこの問題についての包括的な検討を行なっているが、氏もまた「万が一そうした論敵が実在しなかったとしても、本当は全く差し支えないのである(p. 25)」と結論付けている。この同じ地点から出発して、Greenlee はロックの生得説批判にドグマ的な権威の拒否と、発見の方法(a method of discovery)への関心という積極的意義を見出し、他方で一ノ瀬氏は、そこに知識への「同意」という行為の重要性を読み込んでいる。だが本稿では、ロックが想定した論敵の同定・特定という観点からは彼らと同様距離を置きつつも、この両者の出発点の一手手前で踏み止まり、不明瞭で難解な単純さでもというべきロックの生得説批判に耳を傾ける。
- <sup>6</sup> ここで「子ども」と同列に置かれている「白痴」は、幼児程度の知能しか有していない

者と解し、特に「狂人」とは異なることに注意したい。ロック自身、2巻11章13節で、白痴は「知性の諸機能の機敏さや活動や運動の欠如から生ずる」のに対し、「狂人は白痴とは正反対な欠陥に悩まされているように見える」、「なぜなら狂人はその想像の激しさのため、空想を实在事と取り違えてしま」うから、というかたちの区別を行なっている。

- <sup>7</sup> この点について大槻氏(1972)は「ロックが生得論を退け、心は白紙でタブラ・ラサであると強調し、観念が経験の過程の中でまず感覚によって外的事物から得られると説いたことは、タブラ・ラサが彼の哲学の標語になったこととあいまって、心ないし知性にかんする彼の理解を歪める不幸を招いたと言える」と認めているが、我々はロックが「心は白紙でタブラ・ラサであると強調し」という理解に関しては、事実と異なっていると考える。
- <sup>8</sup> デカルトは『方法序説』ではいっそう明快に次のように述べている。「多くのひとが、神を認識することも、自分たちの魂が何であるかを認識することにさえも困難があると思いつている。それは彼らが自分の精神を、感覚的な事物を越えて高めることがけっしてないからである。(中略) これをはっきり示すのは、哲学者たちでさえ学院において、「そもそも感覚のうちになかったものは、知性のうちにはない」ということを格率としてのことだ(DM. IV)。」
- <sup>9</sup> Atherton(1998)は従来のロックに対する疑念を次のように整理している。「ロックは結局『人間知性論』を、単純観念と複雑観念についての彼の見解を置くことから始めている。その代わりに彼は、広範囲にわたる生得観念・原理に対する攻撃によって始めたのだった。しかし第1巻におけるこれらの主張は、たびたびあっさり片付けられてきた。ロックは薫人形を攻撃しており、どんな関心を引く型の生得性をも公正に扱いていないとして、しばしば非難される。」
- <sup>10</sup> ライブニッツの『知性新論』におけるロック批判は、この観点から組織されたものである。
- <sup>11</sup> Atherton(1998)によれば、「標準的な見解(the standard view)は、ロックの生得性の拒絶が彼の経験論の結果であると示唆しつつ、彼の議論の秩序を不正とみなす」。また、「ロックの生得観念・原理の拒絶は[2巻以降における]彼自身の構築的プログラムの成功に依存しているが、そのプログラム自体は生得性を拒絶する十分な理由を示していない、と生得性の擁護者は主張する」。つまりこれは『人間知性論』は循環論に陥っているのではないかという批判であり、これもロックについての「標準的な見解」といえるだろう。このような批判は最近では Rosa(2004)が行っている。

## 略号

Locke

E: An Essay concerning human understanding

『人間知性論』からの引用は、たとえば「第2巻、第1章、第2節」を(II, i. 2)のように略記する。また翻訳は適宜参照したが、文脈に応じて訳文を変更した箇所もある。

Descartes

MP: *Meditationes de prima philosophia*

Pr: *Principia philosophiae*

DM: *Discours de la Méthode*

デカルトの著作の訳は、『省察』と『哲学の原理』については野田又夫（編）『世界の名著 デカルト』中央公論社(1978)を参照し、『方法序説』については谷川多佳子訳、岩波文庫(1997)も併せて参照した。

### 参考文献

Ashcraft, R. (1991), (ed.) *John Locke: critical assessments*, Routledge.

Adams, R. M. (1975), "Where do our Ideas Come from?" In [Stich, 1975].

Atherton, M. (1998), "Locke and Issue Over Innateness", In V. Chappell (ed.), *Locke*, Oxford: Oxford University Press.

Greenlee, D. (1972), "Locke and The Controversy Over Innate Ideas.", *Journal of the History of Ideas*, 33.

Russell, B. (1945 = 1972), *A History of Western Philosophy*, Simon and Shuster; 市井三郎訳『西洋哲学史 1・2・3』みすず書房、1970。

Rosa, R. (2004), "Locke's Essay, *Book I*: The Question-Begging Status of the Anti-Nativist Arguments", *Philosophy and Phenomenological Research* Vol. LXIX No.1, July 2004.

Stich, S. (1975) (ed.), *Innate Ideas*, Berkley: University of California Press.

一ノ瀬正樹(1997)『人格知識論の生成』東京大学出版会。

大槻春彦(1976) (訳、解説) ジョン・ロック『人間知性論』1-4巻、岩波書店。

(かきぬま ひろゆき／上智大学)